

本来の面目・・・私の体験や現在の科学からは認めがたい考え方

a ネット辞典で調べてみました。

仏語。すべての人がもともと持っている自然のままの心性。禅宗でいう。

という事は禅宗で使われる仏教用語で「すべての人がもともと持っている自然のままの心性」ということになります。

b また他のネット辞典では

仏語。衆生が本来持っている、人為をまったく加えない心性。禅の極致という。

ということは「禅の極致に達した人が体現する私たち誰でもが持っている、人為を全く加えない心性」ということだったりします。

私は9ヶ月前に「涅槃（ねはん）」を体験し、阿含経（あごんぎょう）に説かれている「悟りの最終段階」に入りました。今の自分の性格はたいへん宗教ともいえるほど「世のため人のため」を考えられる人になりました。悟りに入る前の 弱く、貧相な自分に比べればまるで別人です。

科学的な考え

今の言葉で言えば、このような人になる「潜在的な可能性」を持っていたと言う事は否定できませんが、「脳を変える心」で脳科学者が明らかにしたように坐禅や瞑想をたくさんしたので「脳が変わった」と考えるのが自然です。

私は可能な限り幼少なころの記憶をたどってみても今の明るさや元気な活発な姿、頭のよさを見つけることができませんでした。

現在の私の姿は毎日の坐禅の積み重ねで勝ち取ったものだと確信しています。「もともとあったのだ」とする禅宗の考えは独善的だと考えます。

「本来の面目」という公案もあるようですが、このような公案に迷わされることなく、自然な坐禅をされることを期待します。

私が尊敬し、大好きな盤珪さんは「坐中に居眠りする人がいると、せっかくいい気持ちで寝ているのだから起こさなくてよい」と指導されていたそうです。私もそのようにいいと考えます。坐中のリラックスが大切で警索でたたいて起こす必要はないと思うのです。その盤珪さんは「公案」は古道具として使われなかったそうです。私もそのように考えています。

盤珪さんが言われたように、ただ、自分の悩みが解決するまで自然に坐ればいい。これが禅実践の極致だと思います。